

白老の愛犬家のワンちゃん 2頭が嘱託警察犬に 「社会に役立てることがあれば」と活動に期待



夢かなう

情報ノート

町内に住む浦木学さん(53)、千織さん(50)夫妻=ともに公務員=の愛犬、ジャーマンシェパードの「リヒト」(6歳、雄)と、小島愛子さん(50)=会社社長=の愛犬、ラフ・コリーの「ラッシー」(4歳、雄)の2頭が、6月に札幌市で行われた道警札幌方面嘱託警察犬審査会の足跡追及部門で見事合格しました。嘱託期間は9月から来年8月までの1年間。道警本部からの犯罪捜査や行方不明者の搜索要請による出動や啓発イベントへの参加などに従事



浦木さん夫妻と愛犬「リヒト」

します。

審査は、犯人・行方不明者役があらかじめ歩き作ったコースを、置かれた遺留品(所持品)を発見させながら所定時間内に正確に追及する内容です。浦木さん夫妻が飼うリヒトは3度目の挑戦。作業訓練が大好きなりヒトは、「社会貢献や



小島さん(右)と愛犬「ラッシー」。左は訓練士の小野寺里絵さん

能力向上に」との夫妻の思いを受け、好きなボール遊びやチャンピオンにもなったことがあるフライングディスク遊びを封じ込めて審査に集中。元来の慎重な動きで見事クリアしました。ラッシーは「警察犬を飼いたい」という小島さんの小さいころからの憧れで、登別のトレーニングハウスに預けて訓練しています。温厚なラッシーですが、審査は一心不乱に搜索に当たり、2019年に続き再び嘱託警察犬となりました。浦木さん夫妻、小島さんは「社会のために何か役立てることがあれば」と愛犬に優しい眼差しを送っていました。

知っておこう
アイヌ文化

トパットウミ

イランカラブテ。9月号では、ウトカンベツの地名と白老にアイヌが定着した所以について紹介しましたが、今回は定着の原因と伝えられる、トパットウミ(夜襲)についてご紹介します。

ある心根の良い村長の一家が突如夜襲に遭い、庭に伏せてあった臼の中へと隠された村長の赤ん坊以外は、全員殺害されるも、お婆さんに化けた臼が赤ん坊を一人前に育てあげ、ついには夜襲をかけた隣国の者へ復讐させる…。

白老町のアイヌ民族の詩人、森竹竹市(1902-1976)が伝承した物語『臼の婆さん』で語られる「夜襲」とは、アイヌ語でトパットウミと呼ばれ、ある村が遠く離れた別の村を襲って住民を全滅させ(物語では子どもが生き残る)、宝物などを奪い、時には子どもをさらっていくこととされ、森竹竹市が残した伝承の中には、「寝る前に外に出てコタン(村)の後方に注意せよ」という言葉が残されています。

これは、トパットウミを仕掛ける人々の影が動く低い林のように見えることから、注意を促すものですが、トパットウミはアイヌ民族の口承文芸に散見する言葉で、実際に起こった出来事かは不明です。

アイヌ民族は、争いごとを徹底的な討論によって平和的に解決する、チャランケという方法を取っていましたから、トパットウミのような全く話し合いを交えることのない行いが凄惨な結果を生むという、教訓としての意味合いが強いのかもしれません。

政策推進課 アイヌ政策推進室 学芸員 森洋輔

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301